

平成17年度  
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 FD 委員会

## はじめに

今日、「FD」という表現がそれだけで通じるようになったのは、適当な訳語が見出し難かったことでもあります。日本の高等教育において「FD」が極めて日常的に使用されるようになったからだと思われます。大学教育の大衆化とその質的向上への社会的要求という環境の変化がFD活動を後押ししています。個々の教員や学部学科でのFD活動は、それまでにも行われていましたが、本学で全学的なFD活動を開始したのは平成14年度からです。大学FD委員会の設置によってこの活動が始まりました。

教育・研究に取り組む大学教員は、自らその専門能力の向上を目指し精進すべき立場にあることは云うまでもありません。自己研鑽こそFDの基本です。大学全体のFD活動は、そのような個々の教員の研鑽を精神的に支えるとともに、自己能力の開発と向上の機会を提供し、教育研究活動の発展に貢献することを目的としています。

平成18年度は、大学FD委員会はこれまでの経験を生かし、また各学部学科の主体性を大切に、研修センターやコア・FYE教育センターとの連携の下にこの目的達成に努力していきたいと考えています。認証評価機関による評価や教員組織の改正といった変化にも適切に対応しながら、本学の教育研究機関としての力を十分に発揮できるよう先生方とともにFD活動を進めていきたいと願っています。

大学FD委員会委員長  
教学部長 高橋 靖直

# 目 次

## I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的 .....	1
(2) 委員構成 .....	1
(3) 今年度の活動計画及び課題 .....	1
(4) 活動状況 .....	2
(5) 活動の成果 .....	3
(6) 今後に向けて .....	3
2. 学部の活動.....	4

## II 教員研修

1. プレゼンテーション研修会	
(1) 実施の概要 .....	16
(2) 研修プログラム内容 .....	16
(3) 実施の状況 .....	17
(4) 実施後のアンケートから .....	17
(5) ディスカッションの実施 .....	21
(6) 実施の成果 .....	31
(7) 平成 17 年度プレゼンテーション研修会参加者一覧 .....	32
2. 新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容 .....	33
(2) 実施の成果 .....	34
3. Blackboard@Tamagawa の活用	
(1) 平成 17 年度学内カンファレンス概要 .....	36
(2) 活用事例報告 .....	36

## III コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要 .....	42
2. 集計結果及び公表 .....	42

### 参考資料

1. 大学 FD 講演会（玉川学園講堂での全文採録・掲載） .....	63
2. 大学 FD 委員会の議事要旨 .....	68
3. プレゼンテーション研修会アンケート用紙 .....	76
4. 「コア科目授業評価アンケート」用紙 .....	77
5. 玉川大学 FD 委員会規程.....	79

# I 大学 FD 活動状況と今後の計画

## 1. 大学 FD 委員会

### (1) 委員会の目的

本委員会は、大学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を以下のとおり明確化している。

- ① 玉川の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員の育成。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

### (2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	高橋靖直
委員	文学部	藤田裕二
委員	農学部	河野均
委員	工学部	山田博三
委員	経営学部	玉木勝
委員	教育学部	金井茂夫
委員	芸術学部	梶原新三
委員	コア・FYE教育センター	菊池重雄
アドバイザー	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部	稲葉興己
事務担当	教育調査企画部	齊藤文則
事務担当	研修センター	柳原達宏

### (3) 今年度の活動計画及び課題（平成 16 年度報告書「今後に向けて」より再掲）

- ・外部講師による大学 FD 講演会を複数回開催する。
- ・プレゼンテーション研修会を継続実施する。
- ・新任教員研修会を継続実施する。
- ・コア科目の「授業評価アンケート」を継続実施する。
- ・教員相互の授業参観及び研究会の開催を推進する。

#### (4) 活動状況

主な活動内容としては以下のとおりである。特に、今年度は一年次教育の全学実施に伴い、昨年度から継続して「一年次セミナー」担当者の研修会等を数多く開催した。さらに、一年次教育国際会議等への教員派遣、研修会の開催、平成 18 年度に向けて新教材の作成等を行った。また、学内教職員の意識を高めるための学外講師による FD 講演会を 2 回追加し、計 3 回開催した。

コア科目の「学生による授業評価」は当初の計画どおり今年度で 3 年目となるが、春・秋学期とも全学的に実施した。平成 14 年度から継続して行っているプレゼンテーション研修会は本年度も 5 回開催し、合計 34 名（初年度からの累積では 161 名、全専任教員の 61.2%）の教員が参加した。

なお、大学 FD 委員会は 3 回の開催であったが、詳細として巻末に参考資料（議事要旨）を掲載した。

##### <平成 17 年度>

4 月 1 日	第 1 回大学 FD 講演会「First-Year Seminars: Supporting and Challenging New Students (Randy Swing、 Ph.D.)
4 月 20 日	第 1 回大学 FD 委員会
6 月 20 日	一年次セミナー授業方法研究会
7 月 1 日	一年次セミナー授業方法研究会
7 月 4 日	一年次教育研究会
7 月 5 日	第 2 回大学 FD 講演会「教員の教育力を高める」(原 康夫氏)
7 月 9～15 日	春学期コア科目の「学生による授業評価」アンケート実施①
7 月 11～14 日	「一年次教育国際会議 (英国サウザンプトン)」教員派遣
8 月 3 日	コア科目担当者研修会
8 月 2・3 日	平成 17 年度第 1 回プレゼンテーション研修会
8 月 9・10 日	平成 17 年度第 2 回プレゼンテーション研修会
8 月 12 日	第 1 回「一年次セミナー102」担当者研修会
9 月 6・7 日	平成 17 年度第 3 回プレゼンテーション研修会
9 月 12 日	第 2 回「一年次セミナー102」担当者研修会
9 月 20 日	第 3 回「一年次セミナー102」担当者研修会
9 月 22 日	第 3 回大学 FD 講演会「子どもの目は大学をどのように見ているか」(高木幹夫氏)
10 月 24 日	第 4 回「一年次セミナー102」担当者研修会
11 月 9 日	第 2 回大学 FD 委員会
11 月 18 日	第 5 回「一年次セミナー102」担当者研修会
1 月 10～16 日	秋学期コア科目の「学生による授業評価」アンケート実施②
2 月 22・23 日	平成 18 年度採用の新任教員研修会
1 月 23 日	第 3 回大学 FD 委員会
2 月 28～3 月 1 日	平成 17 年度第 4 回プレゼンテーション研修会

3月7日	平成17年度「一年次セミナー」実践報告会
3月7・8日	平成17年度第5回プレゼンテーション研修会
3月11・12日	大学コンソーシアム京都「第11回FDフォーラム」教員派遣
3月15日	平成18年度「一年次セミナー」新規担当者研修会
3月20日	平成18年度「一年次セミナー」担当者研修会

## (5) 活動の成果

大学FD講演会は全専任教員対象に今年度は3回開催した。昨年度までは毎年4月に1回の開催であったが、今年度から7月と9月に2回追加した。4月のFD講演会は、当日が本学園の創立記念日ということもあり、その流れから毎年450名前後が参加していたが、7月と9月はそれぞれ42名、58名と少人数であった。しかし、少人数ながらも教員が主体的に参加したことや参加して得られた成果を考えると、着実に教員の意識が高まってきていると言える。

プレゼンテーション研修会は、実施後のアンケート調査によると「有用性」についての回答が一番多く、「授業に役立つ」というコメントが目立った。また、昨年度からディスカッション内容が充実し、これらを通じて教員間に相互理解が深まり、FD活動への意欲も向上した。さらに、改善への提案に結びつくような具体的な意見が出てきたことが成果としてあげられる。

コア科目における「授業評価アンケート」は今年度も2回実施し、昨年度からは各 Semester で計6回実施したことになる。授業毎の集計結果及び記述式アンケートは各授業担当者にフィードバックしているが、昨年度同様、全体及び分野集計の平均値を学内のみ対象にホームページで公表した。

新任教員研修会は、開催後のアンケートにおいて、研修内容が充実していた、教材が分かりやすかった、講師の説明がわかりやすかったと概ね100%の回答を得たことから、本研修会の目的を達成できたと評価できる。

一年次教育の教材については、米国の多くの大学で使用されている教科書の抄訳書を本学が作成し使用したが、担当者、学生の双方に戸惑いと違和感が生じた。このため、本学の実情に即した独自の教科書が必要となり、平成18年度に向けて新たに作成したことが大きな役割を果たしている。

## (6) 今後に向けて

昨年度の報告書に記載のとおり、今年度は大学FD講演会、新任教員研修会に加え、プレゼンテーション研修会も本学の研修センターとの共催の形式で開催した。さらに、大学FD講演会を2回追加開催した。平成18年度以降は、さらに複数回の開催と内容について再度研修センターと調整を図りながら検討をしたい。

また、教員相互の授業参観や研究会は、今年度秋学期から開催したのが6学部中、3学部という結果であったため、平成18年度以降は全学部が開催できるよう、さらに啓蒙活動を推進していきたい。

## 2. 学部の活動

平成 17 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価の実施			学部 研修会	プレゼンテーショ ン研修会へ の参加者数
			実施時期	専任 対象	公表		
文学部	4 名	1 回	春セメ終了後	全員	学内外 (Web)*1	学外 実施	9 名
農学部	6 名	4 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	集計結果 のみ学部	—	7 名
工学部	5 名	8 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*2	学内 実施	7 名
経営学部	24 名 (全員)	4 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)	学内 実施	2 名
教育学部	10 名	12 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学外 実施	6 名
芸術学部	4 名	3 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学外 研修	3 名
コア科目			春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内 (報告書)		

\*1: 文学部における公表は国際言語文化学科である。

\*2: 学外には総括した内容、学内には全てを詳細に Web と紙面で公表している。

各学部専任教員におけるプレゼンテーション研修会の受講修了状況（平成 17 年度現在）

	17 年度専任教員数 (A)	A の中で受講した人数	割合
文学部	75 名	45 名	60.0%
農学部	42 名	31 名	73.8%
工学部	61 名	28 名	45.9%
経営学部	24 名	22 名	91.7%
教育学部	33 名	18 名	54.5%
芸術学部	28 名	17 名	60.7%
合計	263 名	161 名	61.2%

※専任教員は助手以上で、平成 17 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

■各学部における今後（平成 18 年度～）の計画等について、一覧にまとめる。

	今後の計画
文学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員相互の授業参観を推進する。意義と方法について議論を深め、より積極的な形で行う。</li> <li>・学外で開催される FD 関連の研修会へ積極的に教員を派遣する。</li> <li>・「双方向的な授業の実践」等のテーマで授業実践報告会の開催を計画する。</li> </ul>
農学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスの充実とその改善。</li> <li>・Blackboard システムを活用する教員を増やす。</li> <li>・FD 活動が第三者にも見えるようにする。</li> <li>・授業評価アンケート用紙の改善</li> </ul>
工学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全学科 ISO9001 認証に向けて、迅速な学生アンケート集計体制の確立(外注)。</li> <li>・リメディアル教育研究の教育への反映</li> </ul>
経営学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内容・方法に関する研究（継続）。</li> <li>・教員研修会の開催（継続）。</li> <li>・専門科目共同授業に関する研究（継続）。</li> <li>・リメディアル教育に関する研究（継続）。</li> <li>・一年次教育に関する研究（継続）。</li> <li>・学生確保に関する研究。</li> </ul>
教育学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるために一層の FD 活動を推進する。</li> <li>・講義科目の授業評価アンケートに加え、演習、実習、実技科目についてのアンケートを実施し、分析および学生への還元を検討する。</li> <li>・授業評価の目的が教員と学生が共有出来る授業評価案を検討する。</li> </ul>
芸術学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外特殊研究で提携校や新規開拓した施設で、学生及び教師のパフォーマンス等による異文化交流による新しい教育内容を検討する。</li> <li>・双方向に交流する授業形態を企図してもカリキュラムや時間割による制約で阻まれるという状況を解消していく。</li> <li>・芸術学部長賞の創設、卒業プロジェクト演奏及び展示の選抜制導入に対する教師の客観的評価実行の意識改革。</li> </ul>

## § 文学部

### (1) FD 活動への取り組み理念・目標

限られた教員のみが活動を担うのではなく、全員が何らかの形で FD 活動に参加できるような体制を構築する。

### (2) 学部における FD 活動の組織体制

文学部長を交え、文学部 3 学科（人間学科、リベラルアーツ学科、国際言語文化学科）の合同 FD 委員会を開催している。また各学科では、学科会、あるいは運営委員会等の場で FD 活動の企画、運営に関する様々な事項を審議している。

### (3) 17 年度の活動内容

#### ① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果

FD 研修会の開催、学生による授業評価の実施、教員間の授業参観、学外研修への参加など、それぞれの活動で成果をあげることができた。

#### ② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

人間学科では、各科目の授業形態(講義中心・発表・討論)・指導体制(複数の担当者がチームを組んで行うものを含む)・受講者の人数(クラスの規模)・マルチメディアの活用(Blackboard の活用:教材・宿題・課題呈示などを含む)に応じて教員による、授業に関するアンケートによる学生の学習状況の把握、レポート・口頭発表へのコメントなどを通じて学生にフィードバックしている。

リベラルアーツ学科では、各教員がそれぞれの授業形態に応じて、授業に対する学生のリアクションや評価を確認しながら、授業運営の改善に努めた。

国際言語文化学科では、昨年に続き第4回目のアンケート調査を7月上旬に行った。今年度は専攻科目のみを対象とした。アンケート結果は授業ごとに担当教員に知らせると同時に、授業運営委員会で全体的傾向を分析した。コア科目のアンケート結果と比較したところ、おおむね本学科の評価の方が高いという結果が得られた。アンケート結果は本学のホームページに掲載した。

#### ③ 研修活動の組織的な取り組み

プレゼンテーション研修会に文学部から 10 名の参加があった。

人間学科では、京都大学での高等教育研究開発センター主催「大学教育研究フォーラム」への参加があった(3月27日～28日に開催のフォーラムに参加予定)。

リベラルアーツ学科では、教育研究活動の改善へ向けて、日頃から学科全体で取り組んだ。年度末には、学外施設において集中的に、全教員が参加して FD 研修会を実施した。この研修会では、(ア)まず、ワークショップを「インターンシップと大学教育—リベラルアーツ学科における実施例から—」というテーマで行い、実習生受け入れ先企業の社長 3 人を交えてインターンシップ制度の課題を検討した。(イ)次に、学外講師を招き、「リベラルアーツ学科における広報の方向性について」というテーマで

講演会を実施し、受験生や一般社会へ向けた広報戦略を検討することを通して、本学科の教育活動を再検討した。

国際言語文化学科では、京都外国語大学で行われた「第 11 回 FD フォーラム」(3 月 11 日～12 日)への教員の参加があった。

#### ④ その他の取り組み

人間学科では、秋学期(11 月)に学内の FD 活動の一環として教員相互の授業参観を 2 回にわたって行った。

リベラルアーツ学科では、全教員が参加して、DVD 教材「リベラルアーツの学び」を制作した。これはリベラルアーツの学びの特色などを紹介する視聴覚教材である。この制作活動の中で、リベラルアーツ教育のあり方を改めて点検する機会を得た。

国際言語文化学科では、秋学期に教員相互の授業参観を行った。全員が一度は他の教員の授業を参観するという形で行われたが、参加者は 7 名だった。参観者は授業参観報告書を授業担当者と FD 委員に提出した。参観を肯定的にとらえる参観者が多かった。

#### (4) 今後の予定や課題

人間学科では、基本的にはこれまでと同様の枠組みで続ける。さらに、今年度で学科が完成年度を迎えて一部科目に変更を行ったので、今後それらの結果も含めて検討していきたい。

教員相互の授業参観は初年度ということもあり、今年度は十分な形でなされたとは言いがたい。その意義と方法についてももう少し議論を深め、来年度以降、より積極的な形で行われることが望まれる。

学外で行われている研修会、例えば毎年京都で行われている「FD フォーラム」などに積極的に教員を派遣していきたい。

例えば「双方向的な授業の実践」といった様々な「授業実践報告会」のようなものを開催できたらと考えている。

## § 農学部

### (1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ① 全学 FD 委員会と協調しながら、プレゼンテーション研修会などに参加し、また、専任教員は原則として全員が学生による授業評価を行う（ただし実験・実習・演習、また受講者が 10 名以下の科目については除く）。これらを通じて、教員の教育技能開発を推進する。
- ② 若手教員の教育研究活動に援助・助成する。

### (2) 学部における FD 活動の組織体制

大学 FD 委員（河野）、農学部長（佐々木）、生物資源学科主任（新島）、生物環境システム学科主任（岩坪）、生命化学科主任（東岸）、学生主任（小野）計 6 名から構成する。

### (3) 17 年度の活動内容

- ① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果
  - ・専任教員は原則として全員が学生による授業評価を春semester、秋semesterの 2 回行った。また 4 単位科目については複数の教員が担当している関係上、同科目でそれぞれ担当者別に授業評価を実施した（下記 ②）。
  - ・専任教員のプレゼンテーション研修会への参加（下記 ③）。
- ② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用
  - ・学部長の方針により、全教員の協力を求め、農学部科目について、春semester 39 名（52 科目）、秋semester 45 名（56 科目）で実施した。
  - ・春semester、秋semesterの集計結果を掲示する予定である。
- ③ 研修活動の組織的な取り組み
  - 農学部の専任教員でプレゼンテーション研修会へ参加していない教員が残り少なくなり、今年度はプレゼンテーション研修会には、5 回の機会にそれぞれ 1～2 名、計 7 名が参加した。
- ④ その他の取り組み
  - ・学位取得を目ざす若手教員の支援をしている。
  - ・3 学科体制を機会に科目のシラバスを整えた。

### (4) 今後の予定や課題

- ・シラバスの充実とその改善。
- ・Blackboard システムを活用する教員を増やす。
- ・FD 活動が第三者にも見えるようにする。
- ・授業評価アンケート用紙の改善

## § 工学部

### (1) FD 活動への取り組み理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部宣言を具現化するために、教育内容や教育環境の向上をはかる。

### (2) 学部における FD 活動の組織体制

- ・工学部自己点検委員会。各学科から各 1 名＋担当主任、計 5 名で構成。
- ・全教員参加による工学部 FD 研修会を年 1 回開催。

### (3) 17 年度の活動内容

#### ① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果

平成 14 年度から実施してきた学生による授業評価は、16 年度秋セメから全教員・全科目に拡大した。更に 17 年度秋セメからは ISO9001 対象学科を拡大するため、アンケート項目を改定した。

#### ② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

- ・対象教科：非常勤教員による科目、実験、卒業研究を含む全教科。ただし卒業研究等は学科単位で集計する。
- ・開示方法：各教員には全体の集計結果と個人の科目別データ。学外 Web には全体の集計結果公開。学内 Web に全情報を公開(科目別集計シートにおいて教員名は除く。科目担当情報により間接対応可能)。学内 Web と同じ内容を冊子として、玄関ロビーで学生に公開。
- ・対象学科：秋セメからは全学科（春セメはマネジメントサイエンス学科を除く）。
- ・結果の活用：各教員の授業改善に反映する。工学部として Best Teacher's 賞、教育業績評価（昇格審査、予算）に反映することを計画している。

#### ③ 研修活動の組織的な取り組み

- ・全学 FD 委員会で計画されたプレゼンテーション研修会に各学科から参加した。
- ・各学科で、研究授業（教員の参観授業）を実施し、工学部 FD 研修会で報告した。

#### ④ その他の取り組み

工学部 FD 研修会 3 月 23 日

- ・工学部改組 似内部長
- ・各学科研究授業実施報告 / 各学科 ISO14001 活動報告
- ・各学科 ISO9001 活動報告 / JABEE 活動報告 山本 庸介 教授
- ・個人情報の取り扱い 直井 知与 助教授 / 自己点検委員会報告 月岡 邦夫 教授

### (4) 今後の予定や課題

- ・全学科 ISO9001 認証に向けて、迅速な学生アンケート集計体制の確立（外注）。
- ・リメディアル教育研究の教育への反映

## § 経営学部

### (1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ① 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）の輩出。
- ② リベラルアーツを基盤とした経営学教育の実現。
- ③ 21世紀社会に生き残ることのできる経営学部—少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部の形成。
- ④ 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部の形成。

### (2) 学部における FD 活動の組織体

- ① 学部の専任教員全員が参加する FD 会議（年 4 回）を教育研究会および研究発表会の形式で開催。
- ② 経営学部教員研修会（春学期 1 回：専任教員のみで開催、秋学期 1 回：専任教員および非常勤教員で開催。）

### (3) 17 年度の活動内容

- ① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果
  - ・ 学生による授業評価の実施と公開（その詳細は②に記述する）。
  - ・ 一年次教育の実施。（全学科目「一年次セミナー101・102」として平成 17 年度より実施。）
  - ・ 「特別研究 I～IV（ゼミナール）」の見直し—平成 17 年度より「プロジェクト・セミナー I～IV」として実施。
- ② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

春学期、秋学期ともに全専任教員、全非常勤教員が実施—「経営学部オフィシャル・ホームページ」で平成 18 年度春学期分まで公開済み。平成 18 年度の経営学部 FD 会議でアンケート項目および実施方法についての再確認を行う予定。
- ③ 研修活動の組織的な取り組み
  - 〈経営学部 FD 会議〉
    - ・ 研究報告。
    - ・ 国際 FYE 会議参加報告
    - ・ 学外 FD 研修会参加報告。
  - 〈経営学部教員研修会〉
    - ・ 第 5 回教員研修会（8 月実施）—教職課程開始に伴う外部講師による教職関連講和、教職担当からの報告、教職に関するケーススタディ説明。自己点検調査に関する報告と教育内容についての分科会質疑・発表等。
    - ・ 第 6 回教員研修会（3 月実施）—大学における授業のあり方についての教学部長講

演・質疑。3人の先生からの授業運営についての報告と分科会での質疑・発表等。

④ その他の取り組み

- ・リメディアル教育（AO入試合格者および指定校推薦入試合格者対象）の実施。
- ・第5回英語科目担当非常勤教員研修会の開催。
- ・インターンシップ検討会の開催。
- ・経営学部新カリキュラム検討会の開催。

（4）今後の予定や課題

- ①授業内容・方法に関する研究（継続）。
- ②教員研修会の開催（継続）。
- ③専門科目共同授業に関する研究（継続）。
- ④リメディアル教育に関する研究（継続）。
- ⑤一年次教育に関する研究（継続）。
- ⑥学生確保に関する研究。

## § 教育学部

### (1) FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。指導に当たる教員は自らの資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、学部の競争優位性を高めることが教育学部 FD 活動の目標である。

### (2) 学部における FD 活動の組織体制

教育学部長、学科主任、教務主任、学生主任、教務・教職担当及び FD 委員で組織する。

### (3) 17 年度の活動内容

#### ① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果

本学部では社会が求める人材の育成をすることにより、学部の競争優位性を高めることを FD 活動の目標として掲げているが、全教員が担当する教育実習・保育実習での研究授業の訪問指導、またこれらの学校訪問の機会を単に学生指導にとどめるだけではなく、訪問校、園などの学校長や園長、施設長など学校責任者との面談を通して、教育現場の現状や社会的要請と教育の成果や改善すべき点等を調査する機会を FD 活動と位置付けている。さらに、毎年行っている教育長・学校長・園長・施設長などとの協議会において本学部に対する意見・要望を聞くことを通しても FD と人材育成に反映させようとしている。その結果を踏まえて 17 年度もコミュニケーション能力の低下や自然体験の不足を補完するものとして、教員が学生と共に参加した野外教育研修や tap 研修などのプログラムを教育計画に組み込み実行した。また、コスモス祭を表現力・創造力・実行力・伝達力などの育成を図る教育機会として捉え、学部全体で組織的に取り組み、教員と学生が共に育つ「共育」の成果として現れるように FD 活動を実践した。

#### ② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

学生による授業評価はリフレクションシートとして春、秋 Semester 終了時に実施し、講義内容や教授方法の改善点はどのようなところにあるのかを調査した。今年度の結果を踏まえて、授業評価の目的が教員と学生が共有出来る授業評価案を検討している。

#### ③ 研修活動の組織的な取り組み

- ・平成 17 年度から開始された 1 年次教育に関する研修を主な題材にして、答申「我が国の高等教育の将来像」を踏まえ、基礎力の充実を図るために求められる教員の資質と能力についての研修を 1 年次担任が中心となって今年度も一泊二日で実施した。さらに、18 年度から新しく教育学部の独自性を発揮すべく 2 年次教育の中心として「担任ゼミ」の内容を再構成するために 2 年次担任が中心となって一泊二日の研修

を実施した。

- ・教員の資質と能力が、教職に対する愛着、誇りに支えられた知識、技能等の総体であることを、学部長をはじめ FD 委員が中心となり各種の会議等で発言し、FD 活動基盤の意識化を進めた。

- ・FD フォーラムに参加し他大学における FD 活動の内容と実態を把握し、本学部の将来構想や各教員の資質と能力の向上を図るようにしている。

#### ④ その他の取り組み

- ・本年度の秋セメには公開授業を実施し教員相互が授業を参観し合うことにより講義内容、教授方法の向上を図った。

#### (4) 今後の予定や課題

本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるために一層の FD 活動を推進する。具体的には、講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施すること、そして、アンケート結果の検討、学生への還元が課題でもある。

## § 芸術学部

### (1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ・「芸術による社会貢献」を理解し、実践し得る人材育成を全教員が共有し、それに努める。
- ・芸術学部各学科独自のカリキュラムに加え、双方向に連合し合う授業を設定し、より社会貢献に対応する幅を拡大する有意義な学習体験の機会をもたせる指導案を交換する。
- ・社会貢献する機会を得る助成手段の1つとして、多様な職業の理解と就職への意識向上のため、芸術学部とキャリアセンターとの関りを緊密にし、各種説明会や試験の企画とその実践に各学年全担任が協力する。また、VPI 試験など学生の受験感想アンケートを集計し、その内容把握と継続する企画の参考とする。

### (2) 学部における FD 活動の組織体制

- ・芸術学部長・全学科主任・教務主任・FD 委員（場合により海外提携校教員が参加する）を中心に、主任会・主任研修会で活動目標及び実践方法を討議し、拡大教授会で報告しその承認を得る。又、同じく拡大教授会で実践報告をする。

### (3) 17 年度の活動内容

#### ① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果

- ・芸術学部では学生及びその父兄に対し授業・各種指導の説明責任を果すことを重要目標としている。その実施項目の1つとして、全員学生に各セメスターの成績と一緒に各学科の学生中の累積 GPA 順位を提示する。又、特別学習指導の実施とその指導内容を双方確認の下に記録する。
- ・GPA を前提とする評価判定基準及び成績優秀者に対する表彰を設定することで GPA 数値に対する関心度が高まる。

#### ② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

- ・全芸術学部専門科目（専任・非常勤）の授業評価を各セメスター終了時 Web で実施している。その授業評価の結果は各担当者に戻されるが、公開情報として学生・担当者が全評価を知るシステムには到っていない。又、授業評価への参加学生数増加への具体的対策案が未検討である。

#### ③ 研修活動の組織的な取り組み

- ・ヨーロッパ諸国における大学の音楽教育の実態について拡大教授会で海外短期研修参加教員による報告を得る。
- ・FD 共同研究としてニューヨーク市内コロンビア大学、ジュリアード音楽院、FIT のカリキュラム調査の報告と、ロンドン市内メトロポリタン・ユニバーシティのカリキュラム、設備・教員配備視察の報告を受ける。又、例年優秀な受験生を送り、彼等の学習効果を上げている県立新潟中央高校の教育目標及びその実態の視察。

- ・研修活動一環の1つとしてSPI試験、R-CAP試験、VPI試験を実施し、学生と教師両サイドから就職に取り組む方法とその指導法を模索する。

#### ④ その他の取り組み

- ・ eエデュケーションの促進

授業における課題の掲示とそのレポートへの評価、あるいは授業補助資料の掲載、技法素材の転開等学習効果向上を目的としてその使用を促す。又、芸術学部独自の学年別フォーラム開設で、個人対個人でない広い意見・情報交換を図り、単なる学習向上にのみ視点を置くのではなく、広い意味での学習環境の整備と向上を目指す。

#### (4) 今後の予定や課題

- ・海外特殊研究で提携校や新規開拓した施設で、学生及び教師のパフォーマンスやデモンストレーションによる異文化交流による新しい教育内容を考える。
- ・双方向に交流する授業形態を企図してもカリキュラムや時間割による制約で阻まれることを解消していく。
- ・芸術学部長賞の創設、卒業プロジェクト演奏及び展示の選抜制導入に対する教師の客観的評価実行の意識改革。

## Ⅱ 教員研修

### 1. プレゼンテーション研修会

#### (1) 実施の概要

平成 14 年から始まったプレゼンテーション研修会も 4 年目に入った。研修会の運営は 2 年目にすでに軌道に乗り、3 年目からは内容を充実させ満足度の向上を図った。4 年目からは、さらに充実させるために、事務連絡は教務課で、運営は研修センターで行うなど運営面での改善を行った。開催場所も、経営学部から研究・管理棟の 2 階会議室に変更した。事務連絡、場所や施設に関するコメントも肯定的なものが増え、全体の満足度が向上した。

本年度も昨年同様、夏休みに 3 回、春休みに 2 回、合計 5 回のクラスを実施した。参加者合計数は 34 名で、4 年間の参加延べ人数は 161 名となった。すべてのクラスを 10 名以下にしたことによって、学習効果があっただけでなく、教員間のコミュニケーションを図る点でも効果的であった。

各学部とも、専任教員の過半数が受講したことになり、FD 活動についての共通理解ができたと思う。また 2 年目の後半から取り入れたディスカッションでも活発な意見交換が行われ、学部、学科を越えた教員間のコミュニケーションという FD 活動の基盤作りに役立ったと考えている。

#### (2) 研修プログラム内容

2 日間、朝 9 時から 17 時までの日程で、以下に示すように演習が中心である。特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

第 1 日目	第 2 日目
第 1 章：プレゼンテーションの基本 第 2 章：視聴覚教材の使い方	第 3 章：質疑応答の技法 演習 3：基本的な技法の演習 演習 4：ディスカッション
演習 1：模擬授業 プレゼンテーション (1)	演習 5：模擬授業 プレゼンテーション (2)
演習 2：改善点の明確化 ビデオ視聴による改善作業	第 4 章：まとめ 演習 6：アクション・プラン作成

### (3) 実施の状況

開催の日程および参加人数は以下のとおりである。開催場所は、全クラスとも研究管理棟 201・202 会議室である。実施参加者詳細は「参加一覧」参照のこと。

- ・第1回： 8月02日（水）～8月03日（木） 6名
- ・第2回： 8月09日（水）～8月10日（木） 6名
- ・第3回： 9月06日（木）～9月07日（金） 8名
- ・第4回： 2月28日（木）～3月01日（金） 5名
- ・第5回： 3月07日（木）～3月08日（金） 9名

### (4) 実施後のアンケートから

アンケート項目は、継続的に変化を捉えるために、1年目から同じにしている。項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

#### (4) - 1 チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。「#」はクラス番号で、その列の第6行、「計」（網掛け行）は5クラス分の合計である。「点」はA=5、B=4、C=3、D=2、E=1として平均を出したものである。

参考のため、過去3年の年平均を最終行に載せた。1年目は低いポイントも見られるが、2年目以降は、ほとんど数字の変化はない。参加者自身の「スキルの向上」については4.2ポイント、「事務処理・連絡」については4.3ポイントと低めであるが、他の項目はすべて4.5ポイント以上である。最高点が5ポイントであることを考えると、数字によるアンケートは、ほぼ安定したと考えることができる。

#### ① 全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	6	0	0	0	0	6	5.0	1	5	1	0	0	0	6	4.8	1	4	1	1	0	0	6	4.5
2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	4	2	0	0	0	6	4.7	2	1	1	3	0	0	5	3.6
3	7	1	0	0	0	8	4.9	3	7	1	0	0	0	8	4.9	3	1	7	0	0	0	8	4.1
4	3	1	1	0	0	5	4.4	4	3	2	0	0	0	5	4.6	4	1	3	1	0	0	5	4.0
5	6	3	0	0	0	9	4.7	5	8	1	0	0	0	9	4.9	5	5	4	0	0	0	9	4.6
計	28	5	1	0	0	34	4.8	計	27	7	0	0	0	34	4.8	計	12	16	5	0	0	33	4.2
2004	29	3	1	0	0	33	4.8	2004	28	4	1	0	0	37	4.8	2004	10	21	3	0	0	33	4.2
2003	34	3	1	0	0	38	4.9	2003	32	4	1	0	0	37	4.8	2003	12	22	2	1	0	37	4.2
2002	41	15	2	1	0	59	4.6	2002	43	14	2	0	0	59	4.7	2002	10	38	6	4	0	58	3.9

② 研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	0	0	0	6	4.8	1	6	0	0	0	0	6	5.0	1	6	0	0	0	0	6	5.0
2	4	1	0	0	0	5	4.8	2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	6	0	0	0	0	6	5.0
3	6	2	0	0	0	8	4.8	3	8	0	0	0	0	8	5.0	3	7	1	0	0	0	8	4.9
4	3	2	0	0	0	5	4.6	4	4	1	0	0	0	5	4.8	4	4	0	1	0	0	5	4.6
5	3	6	0	0	0	9	4.3	5	9	0	0	0	0	9	5.0	5	6	3	0	0	0	9	4.7
計	21	12	0	0	0	33	4.6	計	33	1	0	0	0	34	5.0	計	29	4	1	0	0	34	4.8
2004	27	6	0	0	0	33	4.8	2004	32	1	0	0	0	33	5.0	2004	29	4	0	0	0	33	4.7
2003	26	10	1	1	0	38	4.6	2003	35	3	0	0	0	38	4.9	2003	31	5	1	0	0	37	4.8
2002	36	17	3	2	0	58	4.5	2002	51	6	1	0	0	58	4.9	2002	40	17	2	0	0	59	4.6

③ 研修会の運営について

日程								時間配分							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	4	2	0	0	0	6	4.7	1	6	0	0	0	0	6	5.0
2	2	4	0	0	0	6	4.3	2	5	1	0	0	0	6	4.8
3	8	0	0	0	0	8	5.0	3	6	2	0	0	0	8	4.8
4	2	2	0	0	1	5	3.8	4	3	1	0	0	1	5	4.0
5	4	2	1	0	0	7	4.4	5	6	2	1	0	0	9	4.6
計	20	10	10	0	1	32	4.5	計	26	6	1	0	1	34	4.6
2004	24	8	1	0	0	33	4.7	2004	26	6	1	0	0	33	4.8
2003	24	9	5	0	0	38	4.5	2003	31	6	1	0	0	38	4.8
2002	28	19	3	5	3	58	4.1	2002	40	16	2	1	0	59	4.6

④ 場所および事務連絡について

昨年度までの会場の経営学部校舎 204 教室は、学部によっては遠路であることから、“学内の中心部で開催してほしい”との意見が寄せられた。当該教室は狭いが、絨毯敷きで、椅子もソファ型で階段になっており、小さな国際会議でも開催できるような充実した施設である。そのため、“特殊な教室ではなく通常の教室で実施してほしい”、という意見が目立った。今年から、研究・管理棟の 2 階会議室で実施した。開催場所についてのクレームは皆無となり、ポイントも向上した。

開催場所								事務処理・連絡							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	0	0	0	6	4.8	1	6	0	0	0	0	6	5.0
2	4	2	0	0	0	6	4.7	2	2	1	1	1	0	5	3.8
3	8	0	0	0	0	8	5.0	3	4	3	0	0	1	8	4.1
4	4	1	0	0	0	5	4.8	4	2	3	0	0	0	5	4.4
5	8	1	0	0	0	9	4.9	5	5	2	2	0	0	9	4.3
計	29	5	0	0	0	34	4.9	計	19	9	3	1	1	33	4.3
2004	24	7	1	0	0	32	4.7	2004	22	9	2	0	0	33	4.6
2003	22	12	2	1	0	37	4.5	2003	16	16	1	2	1	36	4.2
2002	17	24	6	6	0	59	3.6	2002	14	20	15	7	2	58	3.6

#### ⑤ 研修会の開催について

研修を継続すべきか								他の人に参加を勧めるか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	6	0	0	0	0	6	5.0	1	6	0	0	0	0	6	5.0
2	3	2	0	0	0	5	4.6	2	3	2	0	0	0	5	4.6
3	6	2	0	0	0	8	4.8	3	6	1	1	0	0	8	4.6
4	3	0	2	0	0	5	4.2	4	2	1	1	0	0	4	4.3
5	5	2	0	0	1	8	4.3	5	6	3	0	0	0	9	4.7
計	23	6	2	0	1	32	4.6	計	23	7	2	0	0	32	4.7
2004	27	5	1	0	0	33	4.8	2004	29	4	0	0	0	33	4.9
2003	33	4	0	1	0	38	4.8	2003	34	2	1	0	0	37	4.9
2002	46	9	2	2	0	59	4.7	2002	41	14	2	2	0	59	4.6

#### (4) - 2 フリーコメント概要

項目別の数字によるポイントはすでに安定しており、改善項目を洗い出すという点では無意味である。こうした場合、ますますフリーコメントの重要性が増すことになる。集計には労力を要するが、この中には多くのメッセージが含まれている。

フリーコメントは、単純に数で比較するものではないが、昨年度は133件（33名中）あったコメントが、今年は85件（34名中）と少なくなった。これは、ディスカッションが定着し、口頭で意見や希望が伝えられたことに起因すると思われる。

フリーコメント全ての集計を記載することはスペースの関係で省略するが、主だった項目ごとのコメントを、抜粋して記載する。

■「有用性」についてのコメントが一番多く、全体として「授業に役立つ」というコメント

が目立った。主なものをあげると、“授業の改善に役立つ有意義な研修であった”（5件）、“改善点を認識し、改善課題が明確になった”（3件）、“内容が参考になり、よい勉強になった”（3件）、“他学部の教員同士の交流が図れてよかった”（2件）、“今後、授業改善に取り組んでいきたい”（1件）、“改善に取り組む動機づけになった”（1件）などである。

■「運営」に関するコメントはいままで同様、概ね好意的なものであった。昨年までは、1クラスの人数に関するコメントが多かったが、今年は皆無であった。すべてのクラスを10名以下にしたことで運営もスムーズになったからだと思う。

講師を複数にするなどして、運営体制を整えるべきである（2件）という意見が、昨年に引き続いて出ている。これは、講師一人で運営しているために不備がある、という意味ではなく、長く継続していくための体制作りという積極的な意味で書かれたコメントである。今後、FD委員会で検討していく必要がある項目だと感じている。

■「内容」では、“ディスカッションの時間がよかった”というコメントが（3件）、「有用性」での“他学部の教員同士の交流がよかった”（2件）と合わせると、FD活動の基盤である教員同士の情報交換ができたことが、評価されていることがわかる。ただし、“ディスカッションの位置づけが不明確である”（1件）や“ディスカッションが愚痴に終わってしまうのはよくない”（1件）という意見も見られた。これは、ディスカッションそのものを否定することではなく、むしろ内容の充実を図ってほしいという積極的な意見だと解釈できる。来年度からは単なるフリートークではなく、もう少しテーマを絞った方法も考慮していく必要がある。

■「日程」については、“2日間は長すぎる”（5件）というコメントと、“2日間は適切である”（3件）の両方の意見がある。今後も引き続き、2日間で実施する必要性や意義を説明し、理解を求めていきたい。

“9時始まりは辛い”（1件）、“4時に終了してほしい”（1件）という意見があったが、時間短縮することのメリットは少ないので、従来通りの時間帯で実施したい。また、“夜までかかってもよいので1日にまとめてほしい”（1件）“2日連続でなく間隔をおくほうがよい”（1件）という意見もあったが、設備や事務の関係で夜の実施は現実的でないし、時間をあけて同じメンバーを集めることには無理があるので、これらの意見も不採用としたい。

■「参加形態」については、昨年のような、一度参加してそれで終わりにしたくない、という熱意溢れるコメントは、残念ながら皆無であった。むしろ、“研修ニーズを分析してから参加する人を選択すべき”（1件）、“学生評価の低い人だけ受講すればよい”（1件）など、全員参加への否定的な意見が見られた。

ただし、受講者の構成としては“学部、学科を混合する”（2件）という現在の方法を肯定したコメントがあった。

## (5) ディスカッションの実施

昨年好評だった2日目の午前中のディスカッションは、今年も好評であったが、第4回目のクラスでは、プレゼンテーション研修会の中で実施することへの疑問を投げかけるコメントもあった。これは、ディスカッションが無意味であるのではなく、もっと時間をとって本音で話し合うためには、別途企画したほうがよい、という積極的な意見である。

学部・学科という壁を越え、また利害関係のない仲間が本音でフリーディスカッションをしたことに価値があると考えられる。また単に円滑なコミュニケーションが図れた、ということだけでなく、FDに関する共通理解を図ることができたことも重要である。FD活動について共感しあって築いた人間関係が、これからのFD活動を学部・学科を越えて広げていくための原動力となると感じている。ここで出された意見は、積極的かつ建設的なものばかりであり、今後のFD活動の幅を広げるための参考になると思う。是非、FD委員会でこれらの意見を検証して、実施可能なことは実施の方向に進めていきたいと思う。

ディスカッションで出た意見を、クラス別に以下に列挙する。5クラス分を統合せずにクラス別にするのは、フリー・ディスカッションの形式にしたため、出てきたテーマがクラス別に異なるからである。また、なるべく生の声が聞えるように、抜粋したりまとめたりしないで、単に内容別に分類するだけにとどめて記述する。

### 第1回(8/2~3)

メンバー：朱 浩東、下村 恭広、石山 忠之、亀ヶ谷 博、  
山田 博三、中村 慎一（名簿順、敬称略） 以上6名

## ★FD活動について

### 活動の環境

- ・環境の整備ができないと、継続できない
- ・意見交換の場としてのサロンのようなものがあると継続できる
- ・これからは、答えが出ないとしても多めに意見交換が必要である
- ・戦略をたてるためにも意見をまとめていく必要がある
- ・他大学の現状も調査すべきである
- ・玉川だけでなく、外の世界（他大学、外国）のFD活動も見ていく必要がある
- ・社会の現実の変化をもっと吸収すべきである

### FD活動の意識

- ・調査不足のため、参加者の意識が追いついていない
- ・FDについての広報不足である
- ・FDの目的を、広く教員や学生に示していく必要がある
- ・教員には本来授業改善のニーズはあるはずだが、教員が気付いていない
- ・FDを通じて、個人の知的財産を共有できるようになる

### FD 活動の方法

- ・ FD 推進戦略が必要である（現在は無いに等しい）
- ・ FD を通じて教授団としてのネットワークができるとよい
- ・ 情報の共有化がなされていないため、方法論が先行してしまう
- ・ 「やらなくてはならない」では、もう進めない
- ・ 外部を知っている人を、もっと FD 活動に入れるべきである
- ・ すぐに結論を出すのではなく、長い目で考えるべきである
- ・ 特定の個人が実行するのではなく、プロジェクトを組む必要がある
- ・ 疲れている組織になってはいけない

### プレゼンテーション研修会

- ・ プレゼンテーション研修だけが先行してしまった
- ・ プレゼンテーション研修以外の研修も必要である
- ・ 教育心理学、教育工学、児童心理学などのベースが必要である
- ・ 参加の動機はどうあれ、場を共有できることがよい
- ・ 新しい試みは大切であり、継続することが重要である
- ・ 10 年継続していけば、積み重なっていく

### ★教員の仕事について

#### 教育と研究のバランス

- ・ 教育と研究とに役割を分けるべきである
- ・ 教育も研究も両方とも同様に大切である
- ・ どちらも大切であることは理解していても、両方に力を注げない
- ・ 教育業績が、いつまでも評価されないから、研究に偏ってしまう
- ・ 「教育の玉川」なので、率先して教育業績もきちんと評価すべきである
- ・ 一人の能力範囲を超えているのではないか
- ・ 一人ではできない時代なので、役割分担すべきである

#### 教員の質

- ・ 教育歴なしに教員になっている現状でよいのか、考えるべきである
- ・ よい先生と悪い先生のアンバランスがありすぎて困る
- ・ 教員の社会意識の希薄さを認識すべきである
- ・ 教員は「人を育てる」職業であることを、もっと意識すべきである
- ・ 大学大衆化とは、学生だけでなく教員も大衆化していることを認識すべきである
- ・ 教員には説明責任があるはずで、それを果たしていないのではないか
- ・ 動機づけをして、学問へと導いていく責任があるが、果たしているのだろうか

## 学生の指導

- ・学生に具体的な解決法を示す必要がある
- ・学生とのギャップがだんだんと大きくなる
- ・知的な楽しみを学生に示すべきである
- ・学問的な蓄積を学生に示していかなければいけない
- ・学問の到達目標を学生に示せば、学生の意識も変わる
- ・個性を大切にすべきである
- ・個性的な指導を受けると、学生も変わるはずである
- ・学生は教師の背中を見て成長するものである
- ・背中を見せても分からない学生が増えている
- ・教師と学生の間に心のつながりが必要である
- ・心のつながりを築くためにも、授業の工夫が必要である
- ・現実的な解決策を示す必要がある
- ・学生への動機付け、夢を持たせる必要がある

### 第2回 (8/9~10)

メンバー：小田部 進一、油谷 耕吉、渡辺 京子、大塚みゆき、  
大藤 正、安本 高裕（名簿順、敬称略）以上6名

## ★FD 活動について

### 活動の環境

- ・FD 活動や研修を、やりっぱなしにしてはいけない
- ・Plan と See がきちんとしていない
- ・Do はするが、それをフォローし、フィードバックすることができていない
- ・Do の部分を管理するマネジメントがない
- ・方向性は明確になっているが、それを下の人々に明確に伝えていない
- ・学部や学科の目標が不明確である

### 活動の内容

- ・FD 活動の中で、話し合ったり、情報交換する場を作ってほしい
- ・秋学科から授業参観（公開授業）を実施するが、実態は？
- ・公開授業もやりっぱなしではいけない
- ・実施後の反省会が開かれて、フィードバックしないと意味がない

## 学生による授業評価

- ・アンケートの書き方が適切でない
- ・アンケート項目に、科目による特性が反映されていない
- ・フリーコメントに参考になる意見がない
- ・いい加減な意見ではなく、意味ある意見を書かせる必要がある
- ・本人、学生、第三者からの評価を実施して、それをオープンにすればよい
- ・学生からの評価しかないのはおかしい
- ・アンケート結果のフィードバックがない
- ・アクションの取れるような項目になっていない
- ・授業途中でアンケートをとらないと、その学期の授業に反映できない
- ・記名式アンケートにすべきである
- ・成績に関係すると思われるので、記名式は学期末のみがよい
- ・途中でも、改善策を書いてもらうようにするとよい

## ★教員の仕事について

### 業務の内容

- ・教員が本来の業務以外のことで忙し過ぎる
- ・多忙で職員に手伝ってほしい場合がある
- ・学校行事の忙しい時期には、職員は手伝えない
- ・全体の効率が悪いのではないか

### 教員の質

- ・現場の教員の意識は少しずつ変わっている
- ・結局は、教員の意識は昔から変わっていない
- ・教員の意欲が向上するような仕組みを考えるべきである
- ・プレゼンテーション能力が高まっているのか疑問である

### 学生の指導

- ・学生の知識レベルの格差がありすぎる
- ・大学側でも、何を目標とするのか明確にしていない
- ・昔は学科名から目標が分かったが、今の学科名は曖昧である
- ・学生の評価方法がおかしいのでは？（例：GPA）
- ・GPA は、基本的な統計の研究をすべきである
- ・GPA は総合的能力を測るものというが、目的を達していないのではないか
- ・学生の意識をどう変えていくのか
- ・学生の意識を変えるための効果的なプログラムがない
- ・そのために FYE があるのではないか
- ・FYE は内容に無理がある

- ・ FYE は、専門家が教えるべきである
- ・ 学生になぜ大学に来たのかを考えさせる必要がある
- ・ 評価がむずかしい科目（リーダーシップ/コミュニケーション/プレゼンテーションなど）を、どの科目で高めていくのか？
- ・ ある程度のレベルを保って授業をすると、学生が理解できない
- ・ 学生が理解できないと、それは教員の教え方が悪いと評価される
- ・ 理解できるようにレベルを下げると、学生のレベルはどんどん下がってしまう

### 第3回 (9/6~7)

メンバー：田代 葆、中林 良雄、高崎 宏寿、土山 牧夫、水野 真、  
佐藤 健治、今尾 佳生、向山 光則（名簿順、敬称略）以上8名

#### ★FD活動について

##### 活動の環境

- ・ 教授間での参画意識の差が大きい
- ・ FD研修という名前で、各学部で実施しているが、内容はバラバラである
- ・ 教授環境が整備されていないところでFDの資質向上はできない
- ・ 文科省の意向に沿うことばかりになっている
- ・ 補助金をもらうためには仕方がない

##### FD活動を阻害する要因

- ・ 情報交換する場がない
- ・ 担当者会ではよく話されるが、意見をまとめて上にあげる仕組みがない
- ・ 併設校の教科書決定にも教育学部に打診がないなど、情報伝達ができていない
- ・ 教授会が報告会になってしまっはいけない
- ・ 責任の所在が不明確である
- ・ 新設の学科への対応ができていない
- ・ 教育が目的で、経営は手段であるはずだが、目的が忘れられているのでは？
- ・ セメスター制のメリットが活かされていない
- ・ 文科省の官僚主義の影響が強い
- ・ 私学の自主性はどうなっているのか
- ・ 設備投資よりも人的資源への投資が必要である
- ・ 少人数制が玉川のウリなので、それを守るべきである
- ・ 自主的に研修しようと思っても、手続きしないとできない
- ・ 届け出ないと保険が降りないが、届け出ると実施できない場合がある

- ・職場環境や組織に目を向けずに活動はできない
- ・学部独自性を認めてカリキュラムを組むなどの裁量権が必要である
- ・リベラルアーツ・カレッジのような考え方にするとよい
- ・教学部棟ができてから、事務のサポートが浅くなった
- ・学部学科の職員やアルバイトがいると、もっと運営しやすくなる
- ・事務職員が必要なところに配置されていないのではないか
- ・データの所在が不明確である
- ・教育を経営モデルとして考えてきたことに無理がある

## ★教員の仕事について

### 業務の内容

- ・教育と研究ができる時間がほしい
- ・教育業績の評価が不透明である
- ・教務などの運営の業績が評価されていない
- ・非常勤を減らしているので忙しくなっている
- ・補講ができない状況である
- ・教員の業務が増えている
- ・保護者のケアも業務上の負担になっている
- ・教員の人数は他大学に比べて多いはずである
- ・現場で働いている人の不満がどんどん増えてきている
- ・教員が自主的に何かをしようとすると抵抗がある
- ・F Y E担当者は負担になっている
- ・教育の品質管理という考え方のために余裕がなくなってきた
- ・私学助成金が首を絞めている（独自性がなくなる）
- ・第三者評価などの書類作成に負担がかかる

### 学生の指導

- ・レディネスを教員が把握していない
- ・高校を卒業した時点でレディネスの差がある
- ・学科独自でレディネスの差をなくすことを考えるべきである
- ・高校の情報科が機能していない
- ・指定校入試の学生の資質に問題がある
- ・どんな学生が欲しいのか、ポリシーを明確にすべきである
- ・推薦入試が同じ基準であることがおかしい
- ・多種多様な人間がいるのは当然である
- ・1年生でアルファベットを読めない学生もいる
- ・ゆとり教育の結果で、質が落ちているのではないか

- ・努力しなければ、できないことを理解させるべきである
- ・上限が 20 単位なので遊んでしまう
- ・16 単位になったらもっと弊害が出てくる
- ・講義科目を 100 分 1 単位にすれば、融通できる
- ・単位の上限のために、本来のリベラルアーツが実現できない
- ・学生の気質が浅くなってきた
- ・FYE は、真の問題解決になっていない
- ・全学同じことを一斉にするのは問題である
- ・学部の独自性を出す必要がある
- ・一律の規定で運営されるので学部の独自性がなくなる
- ・FYE で、学生の心の中にまで踏み込んでよいものか
- ・現場にいる教員が考えるべきことである
- ・学部間で単位取得ができるとよい
- ・コア科目を抽選にするので、学生も計画が立てられない

#### 第 4 回 (2/28~3/1)

メンバー：小野 正人、芳賀 実、竹内 正男、川崎 登志喜、高岡 明  
(名簿順、敬称略) 以上 5 名

#### ★FD 活動について

##### 活動の環境 (米国との関係など)

- ・米国のものをそのまま持ってきてよいのか疑問である
- ・FD も FYE も米国のものを導入している
- ・世界トップの国の教育方法を学ぶのは必要だが、直輸入はいけない
- ・米国は多民族の国だから規格が必要になる(日本とは異なる)
- ・米国の丸写しでなく、玉川オリジナルの FD を作るべきである
- ・日本の環境をベースにすべきである
- ・米国の大学間の格差は、日本とは比べられないほど大きい
- ・12 信条に基づいた玉川の新しい方法を考える場として FD 活動がある
- ・問題ある教員を排除するには効果があるが、能力のある教員をだめにする

##### プレゼンテーション研修会

- ・プレゼンテーション技法だけでなく、内容についての改善も必要である
- ・一人ひとりの学生に対応できるような教育法にも触れてほしい
- ・農学部では独自のプログラムで、新任教員が全員、自分の経験を発表している
- ・全人教育の講話で新任教員が経験談を発表している
- ・農学部では、研究談話会がある

### FD活動を阻害する要因

- ・ P マーク、ISO、JABEE など個別にはよいものだが、教育の時間が割かれる
- ・ 種々の活動のために資料作成に時間がかかる
- ・ 資料を揃えるために、かえって効率が下がる
- ・ 質が下がる
- ・ フリートークの結果、個々の問題に対する解決策を出すことが必要である
- ・ 定義づけを新しくしていく必要がある（これが FD 活動である）

### ★教員の仕事について

#### 業務の内容

- ・ 研究と教育の両方をする日本の教員の実情を考慮すべきである
- ・ 理由や背景などの説明なしに、やらなければならないことが多々ある
- ・ やるべきことに対する共通認識がないうちに実施させられる

#### 学生の指導

- ・ FYE は、米国の平均レベルの大学のものである  
（米国の平均レベルは、日本の大学のレベルよりもかなり低い）
- ・ 学部や学科で、教員が自分の味を出せるようにすべきである
- ・ 専門家でない立場で指導するのは辛い
- ・ 誰が作っても同じ質を求めるモジュール形式は日本に合わない
- ・ 玉川版の FD 活動、FYE が必要である
- ・ FYE は、最初は専門家が実施して翌年担当する人がそれを習うとよい
- ・ 内容的に不備がある
- ・ FYE は教育的なサービスに重点をおくべきである
- ・ 勉強の仕方（暗記ではなく自分で学ぶ方法）など教育的サービスが必要である
- ・ 小・中・高の規格化の結果、勉強の仕方が分かっていない
- ・ 一人ひとり異なる自分のノートを作ることのほうが大学では必要である
- ・ 人まねではできるが、自分のオリジナルのノートが作れない
- ・ 試験のための勉強になってしまう
- ・ 人間を育てるために規格合わせは必要ではない
- ・ 事務的なサービスと教育的なサービスを分けるべきである
- ・ FYE は質の低いものを引き上げる効果はあるが、人間性は全人教育ですべき

## 全人教育

- ・溢れる情報から意味あるものを取り出して自分のものを構築していく力が大切である
- ・それこそ全人教育である
- ・知識がつくことと、知恵がつくこととは異なる
- ・学生を部品として扱わないのが全人教育である
- ・人間性についてフォローしていかなければならない
- ・自分の考え方を確立できる人間にするのが大学の義務である
- ・教員側だけでなく、学生側にも課すことが必要（進級のための GPA など）
- ・学生に課す内容を議論するのも FD 活動である
- ・全人教育をするための研修がないので、できるわけがなかった
- ・新任教員の研修を 3 年前から始めたので期待している
- ・今こそ新しい全人教育を考えるべきである

## 学生の質

- ・米国では多くの学生が自分でお金を出している所以必死である
- ・米国ではチャンスが与えられる
- ・成績は素点をつけたいが、それでは単位を取れないレベルの学生がいる
- ・大学に行きたくない理由を親にも説明できない学生がいる
- ・自分ではなく、大学側の理由で止めたい学生がいる
- ・何のために大学にきたのか説明できない学生がいる
- ・ガイダンスがあるが、効率が悪いのではないか
- ・ガイダンスに教員の経験を入れることによって、ノウハウは共有できる

### 第 5 回 (3/7~8)

メンバー：安間 一雄、ジョン・A・フーキンス、八木橋 伸浩、岩坪 友義、福田 靖、  
高橋 泰隆、石川 秀香、岡島 佳樹、江里口 歡人  
(名簿順、敬称略) 以上 9 名

## ★FD 活動について

### 活動の環境

- ・組織としての改善活動を具体的にするためにテーマを絞るべきである
- ・FD の位置づけを明確にすべきである（今は不明確）
- ・組織を超えたものとして FD を捉えるべきである
- ・どうして米国をモデルにするのか？
- ・何事も米国のまねをしたがる

- ・モデルするなら格差のある日米ではなく、似たものを比較検討すべきである
- ・米国の規格をうまく取り入れて日本は成長してきたのではないか
- ・うまく取り入れて日本に定着させることが大切である
- ・FDはうまく定着していないのでは？
- ・ビジネスの世界と大学での相違点や共通点を明確にすべきである
- ・玉川の風土に合ったFD活動が必要である

#### FD活動を阻害する要因

- ・ISO、Pマーク、FDなどが有機的に結びついていない
- ・活動が多すぎ、会議や書類が増えるなどの弊害がある
- ・もっとスリム化すべきである
- ・活動だけでなく組織もスリム化すべきである
- ・情報の流れが明確でない
- ・情報が伝わりにくい組織になっている
- ・村社会のよい点と悪い点が混在している
- ・担当者が変わるとか活動が継続されないことがある
- ・責任部処が不明確のため無駄が多い
- ・FDの目的や効果について、誰もきちんと説明していない
- ・潜在的な能力をうまく使っていない
- ・外的要因（全入時代、グローバル化）にどう対応すべきか明確でない
- ・ソーラーカー、ロボット、風車など独自のものがあるが、単発になっている
- ・組織の上のほうにいくほど夢がなくなってくる構造になっている
- ・組織の上に行くとも会議や仕事に追われてしまう

#### プレゼンテーション研修会

- ・プレゼンテーション研修以外にも研修をすべきである
- ・運営も含めて具体的な技法を教える研修も必要である

#### 学生による評価

- ・アンケートの評価方法を教育すべきである
- ・アンケートは形式だけ整えればよい、ということになりがちである
- ・アンケートのとり方に問題がある
- ・授業の最終回で取るのが問題である
- ・意見があっても、どこに持っていけばよいのか不明である
- ・教員も学生も、前向きな意見があってもどこにだせばよいかわからない

## ★教員の仕事について

### 業務環境

- ・ 人事評価が明確でない
- ・ 研究と教育のどちらを目標にしてよいか不明確である
- ・ 学部の FD でも授業改善の話はあるが、研究についての話は出てこない
- ・ 価値ある議論が認識されていない
- ・ 研究と教育以外の業務で多忙になってしまう

### 学生の指導

- ・ 玉川の風土に合わせた指導が必要である
- ・ 玉川らしさを教えていく必要がある（全人教育の再確認）
- ・ 玉川の財産をもって前に進むべきである
- ・ 根本にある全人教育を忘れていてのではないか
- ・ 私学は、もっと独自のカラーを出すべきである
- ・ 時代にあった全人教育を前面に出して指導すべきである
- ・ FYE では、学生を平均化しようとしている
- ・ もっと独自のものが必要である
- ・ FYE を直輸入せずに玉川版にすると、結果として全人教育になる
- ・ FYE は、1年目の反省から改善すべきである

## (6) 実施の成果（14年度からの実施を含む）

定量的にみると昨年度と同レベルの研修を提供した。定性的にみると、より一層、FD 活動への理解度向上が図れたと考えることができる。昨年度からディスカッション内容が充実し、これらを通じて教員間に相互理解が深まり、FD 活動への意欲も向上した。また、改善への提案に結びつくような具体的な意見も多く出てきた。こうした具体的な提案ということは、大きな進歩と考えることができる。これらの案を FD 委員会において、話し合うことは時間の関係で実現できなかったが、この報告書にまとめることによって、少しずつよいアイデアを積み重ねていきたいと思う。

アンケートのコメントやディスカッションにおける意見は、受講された教員全員にフィードバックし、改善状況を示していきたいと思う。

(7) 平成 17 年度 プレゼンテーション研修会参加者一覧

学部	学科	在職者数(人)	平成 17 年度参加者氏名 (敬称略)					※累積数(人)
			第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	
文	人間学科	13		小田部進一				5
	国際言語文化学科	36	朱 浩東	油谷 耕吉	田代 葆		安間 一雄 ジョン・A・F・ ホプキンス	22
	リベラルアーツ学科	20	下村 恭広		中林 良雄		八木橋伸浩	13
	(教育学科)	6						5
農	生物資源学科	13		渡辺 京子		小野 正人		10
	生物環境システム学科	12			高崎 宏寿		岩坪 友義	7
	生命化学科	17	石山 忠之	大塚みゆき		芳賀 実		14
工	機械システム学科	13	亀ヶ谷 博				福田 靖	7
	知能情報システム学科	16	山田 博三			竹内 正男		7
	メディアネットワーク学科	13			土山 牧夫 水野 真			8
	マネジメントサイエンス学科	14			佐藤 健治			5
	(機械工学科)	3						0
	(電子工学科)	1						1
	(経営工学科)	1						0
経	国際経営学科	24		大藤 正			高橋 泰隆	22
教	教育学科	22			今尾 佳生	川崎登志喜	石川 秀香 岡島 佳樹 江里口歡人	13
	乳幼児発達学科	11	中村 慎一					5
芸	パフォーマンス・アーツ学科	19		安本 高裕	向山 光則	高岡 明		11
	ビジュアル・アーツ学科	9						6
計 (人)		263	6	6	8	5	9	161

※在職者数は助手以上で、平成 17 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

※累積数は当該学科の平成 17 年 5 月 1 日現在在職者の中で、平成 14～17 年度に研修を受講した専任教員の累積数。

## 2. 新任教員研修会

平成 18 年度採用の新任教員（助手以上）に対し、研修センターが取りまとめ、各部の協力のもと研修会を実施した。この研修会は 14 年度より開始されたもので、4 年目の開催となる。参加者 16 名（欠席者 1 名は後日別日程で開催）で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 18 年 2 月 22 日（水）・23 日（木）10:00～17:00

場 所：研究・管理棟 210・211 会議室

対 象：平成 18 年度採用の助手以上の新任教員

研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・教育方針に対する理解を求め、専任教員としての業務を支障なく遂行できるよう、また新しい時代に向けた学園の発展に貢献できるよう協力を求める。

### (1) 研修プログラム内容

【2 月 22 日（火）】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	玉川大学の教育理念と教育方針		学 長
10:30	自己紹介（1 人×1 分）		研修センター
11:00	研修内容説明		研修センター
11:10	玉川学園の組織機構、玉川大学の概要、専任教員の業務（各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導等）、FD 活動の現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・玉川学園組織機構図</li> <li>・教職員数・学生数</li> <li>・学部運営組織</li> <li>・平成 17 年度学生指導要項</li> </ul>	教務課
12:00	昼 食		
13:00	玉川大学紹介ビデオ（VTR）		研修センター
13:20	玉川大学 1 年次教育について	・玉川大学の 1 年次教育について	コア・FYE 教育センター
13:50	休 憩		
14:00	キャンパスツアー		教務課 研修センター
15:00	休 憩		
15:10	研究費と出張（国内外）の手続き等について、教学事務手続要領について、個人研究費、学部予算・執行について	平成 17 年度 <ul style="list-style-type: none"> <li>・教学事務手続要領</li> <li>・個人研究費使用マニュアル</li> </ul>	学務課
15:40	経費口座と JCB 法人カードについて	・経費口座および JCB 法人カード申込みについて	資金課

15:50	休 憩		
16:00	服務について	・ 大学教員の勤務について ・ 福利厚生サービス	人事課 給与課
16:40	校歌紹介 (音楽祭 DVD)	・ 校歌の生まれたとき	研修センター
16:50	質疑応答 翌日の予定説明		研修センター

### 【2月23日(木)】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	映画「新教育の開拓者—小原國芳」 (VTR)		研修センター
10:40	図書館利用について		図書館
11:00	年間授業計画、カリキュラムの概要、学 則・規程等 (Notes 掲示板の活用、授業、 休講、補講、試験、成績等)	・ 年間授業計画一覧 ・ 年間授業計画 (春・秋学期) ・ 始業日程	授業運営課
12:00	昼 食		
13:00	玉川大学の ICT 環境について Blackboard の利用について Notes の利用について (休憩含む)	・ 玉川大学の ICT 環境につい て ・ KG-Net 運用規程 ・ Notes システムについて ・ e メールアカウント申請書	情報システム メディアセン ター
14:30	休 憩		
14:40	教職員研修について	・ 日経 BP ムック 「変革する大学」	研修センター
15:00	研究者情報システムについて	・ 研究者情報管理システム操作手順	教務課
15:20	玉川学園個人情報保護方針について	・ 玉川学園における個人情報 保護への取り組み	情報システムメ ディアセン ター長
15:50	休 憩		
16:00	玉川学園環境方針について	・ 環 境 問 題 と ISO14001 他	環境保全課長
16:30	玉川大学の専任教員として期待する こと		教学部長
16:50	質疑応答 まとめ		研修センター

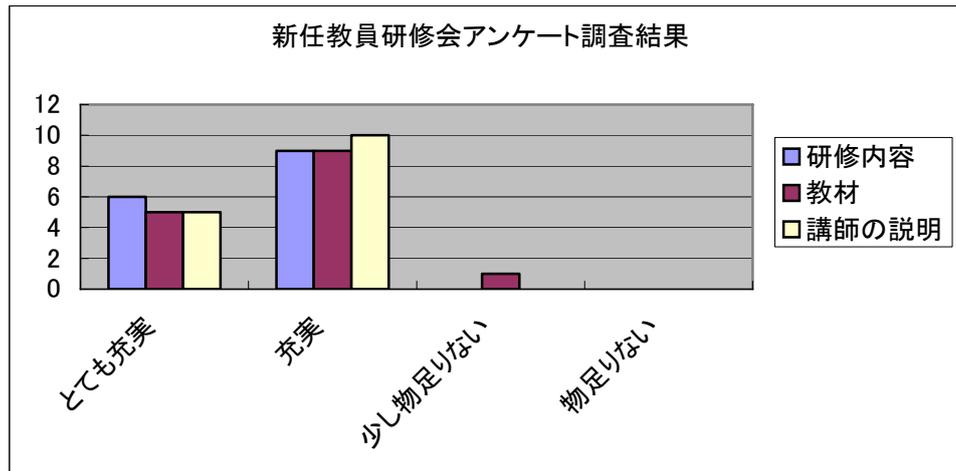
### (2) 実施の成果

今年度は、実施後のアンケート調査（下表）によると、研修内容・教材・講師の説明について、参加者のうちほぼ全員が充実していたと回答している。とりわけ、説明や資料、キャンパスツアーを通して教育理念や玉川学園の歴史等について知ることができたという

意見が多かった。また、他の新任教員と知り合えたこともあげられる。このことから、専任教員としてスムーズな業務遂行ができるよう多くの情報を得ることができ、本研修会の目的は達成できていると評価できる。

一方で、改善を要する点として以下の項目があげられた。

- ①パソコン関係の入力や研修等は、直前のほうが記憶に残る。
- ②ITやシステムに関する説明は、外部からの者にとっては少し複雑で難しかった。
- ③新任者同士の会話の時間がもう少し欲しい。



### 3. Blackboard@Tamagawa の活用

本学では、平成 10 年度から一部の学部で e ラーニングの取り組みを始め、平成 16 年度 4 月には全学共通の授業支援システム「Blackboard@Tamagawa」の活用が始まった。本システムは、平成 16 年度に開講された授業のうち約 18%で利用され、平成 17 年度春学期には 36.5%に達した。また、活用事例の報告を中心とした学内カンファレンスを開催し、教員相互の情報交換や議論の場となっている。

#### (1) 平成 17 年度学内カンファレンス概要

開催日：平成 17 年 7 月 27 日（水）

参加者：23 名

内 訳：教員（発表者含む） 12 名（専任：10、非常勤：2）

職員 1 名

Blackboard 社スタッフ 1 名

メディア教育推進室スタッフ 9 名（教職員：8、学生アルバイト：1）

内 容：専任教員による活用事例報告（4 件）

メディア教育推進室による平成 17 年度春学期の Blackboard@Tamagawa 稼働報告

メディア教育推進室教材作成支援アルバイト（大学院生）による報告

#### (2) 活用事例報告

活用事例報告①（出典：e-Education NewsLetter、2005 Vol.2）

経営学部国際経営学科： 飯 野 峻 尾 教授

「MyPC を携帯する学生が学ぶ経営学部特別研究（ゼミ）での活用」

専門は経営学、特に貢献主義人的資源管理の研究です。経営学部は 2001 年学部創設時から学習支援システムを導入し、学生は各自 MyPC を携帯できる環境で、今春第一期生が卒業しました。飯野先生は授業中に MyPC 携帯は必要に応じて最低限にし、対面授業を進められています。そして、対面授業以外の時間に Blackboard を含め、ICT を十分に活用した様々な学習機会を学生に提供されています。タイムリーに出される、学生に呼びかけるようなアナウンスには先生のお人柄が反映されており、学生に好評です。また、課題指示・提出・返却に Blackboard@Tamagawa を使い、提出課題には必ずコメントをつけて全課題を返却されています。今回は特に特別研究（ゼミ）での活用を中心にご紹介いただきます。

科目の実施規模と Blackboard の活用

◆ 科目名：特別研究 I 3 年生 12 名

特別研究 III 4 年生 16 名

◆ 授業の概要：科目は Semester ごとではあるが、2 年間特別研究 I～IV（ゼミ）受講学生メンバーは変わらずに受講。講義では、人件費を理解、人件費分析手法の習得、事例調査分析を通して人件費のポイントや運用課題などを段階的に学び、最終的に卒業報告書としてまとめる。

◆ Blackboard の活用：授業で使用する講義資料の掲載、ディスカッションボードの活用、課題指

示・課題シートのダウンロードなど。

「学生は授業前までに資料をディカッションボードに本人が掲載。メンバーは各々で授業前までに閲覧、質問・問題意識をもって、授業に参加する。授業で発表、討議、指導し、授業後はディスカッションボードにメンバーからのコメントが投稿される」というローテーションで展開される。参加している学生は、募集の要件である「必要な前提科目を履修し、パソコン操作堪能者、自主性、創造性および行動力がある者」との下に希望した学生たちで構成されている。

### 特別研究ならではの Blackboard の活用

学生たちの自主性を引き出すために【授業と授業をつなぐブリッジ】として活用している。特にディスカッションボードでの担当学生の発表は授業中にとどまらない。たとえばゼミで本を書くという目標があるが、学生からの申し出をうけ、ファイルの共有や連絡のためのフォーラムも開いている。個別のゼミのホームページを開くという方法もあるかもしれないが、Blackboard を活用することでその機能は十分活用できていると思う。また、Blackboardによって、パソコンが使えるかどうかではなく、コミュニケーションの選択肢が増えたと考えている。もちろん取り上げている学問領域が計数を使う



特別研究Ⅲディスカッションボード

のでパソコンは必須なのだが、堪能な学生を中心に互いに教え合い、さらに使いこなしている。eラーニングを「高度な授業で・・・」とがんばるよりも、身近で工夫をしてたくさん使っている、という感じ。

### 講義の資料を掲載することについて

教員によっては論議が分かれるけれど、私は事前に必ず講義資料を掲載する。学生によってはそれをダウンロードしてノートを作る者もいれば、あとで復習に活用にする者もいるし、欠席者は当然活用している。そうすることによって、学生の予習に提供できるし、教材にまつわる雑件から教員自身も解放される。「ノートをとらなくなる」といわれる人もいるが、講義ノートを掲載したから、「授業を聞かない」ということもないし、学習度合いが下がるということを経験的にはない。

### 操作機会が多いと

学生は ICT を活用するノウハウをあっという間に身に付けていく。別の科目で 1 年生の必修科目「経営学」では 1 年生の春セメから毎回の授業でサマリーを作らせ提出を義務づけている。ちょっと大変かもしれないけれど、入学直後でわけがわからない学生でも数回で充分よいものをまとめられるようになる。もちろん 40 人が提出してくる毎回のサマリーはすべて読み、コメントを Blackboard から個別に返却している。未提出者へ「まだ提出されていなかったぞ」と注意し、内容的にモデルになる提出があったときは「よかったこと」を必ず教室でも紹介するようにして

いる。

### 今後の経営学部の ICT 活用について

学生にとってはパソコンをつかう温度差はあまりないと思う。彼らは適応が早いから、使う機会があればすぐに適応していく。科目の特質から活用方法は違うけれども、パソコンや操作を学ぶことが目的ではなく、パソコンをどう使うか・使えるかを体感してほしい。意識的に道具として活用し、機会が増加すれば体得していくし、学びに大学に来ているのだから、大いに学べばいい。インターンシップの募集などの科目外でもすでに活用している。さらに、活用機会を増やしていきたい。

### 活用事例報告②（出典：e-Education NewsLetter、2005 Vol.3）

文学部国際言語文化学科： 作 間 由美子 講師（非常勤）

「専門科目で非常勤講師の立場からBlackboard を活用」

作間先生の専門分野は児童文学。文学部と文学研究科の授業を担当されています。大学での滞在時間が限られている非常勤の立場からのご意見を伺いたく、2003 年度秋学期のパイロット時から Blackboard を試用していただきました。作間先生は、大学での講義以外にたくさんの翻訳・著作や編集の仕事を通して子どもたちに本の楽しさを伝え、活躍しておられますから、むしろ【さくまゆみこ】のペンネームで多くの方が親しんでいることでしょう。福音館書店の児童向け月刊誌「たくさんのふしぎ」2004 年2 月号『エンザロ村のかまど』が発端で、人脈とお人柄から多くの本が集まり、2004 年夏にはアフリカのケニアにあるエンザロ村に子ども図書館を設立。" サンタクロースおばさん"の一面もお持ちです。

### 科目の実施規模とBlackboard の活用

◆ 科目名：児童文学研究

専門特殊講義（英米児童文学）

◆ 授業の概要：世界の児童文学の特徴や問題点を、毎回のテーマに沿って考える。子どものための本の多様性を理解し、主な作品について知り、児童文学にまつわるトピックや児童文学が直面する問題について考え、自分なりの意見をもつことを目標にしています。

◆ Blackboard の活用：私の専門は児童文学で、上記の授業以外に大学院文学研究科の「翻訳論研究/ 英語圏児童文学翻訳研究 I 」でもBlackboard を使いました。

学部の授業では毎回のテーマ（例えば「ファンタジー文学の変遷と現在」とか「昔話は残酷か？」など）に沿って、さまざまな作家や文献を具体的に提示しながら、学生と一緒に考えるという形をとっています。

そのためには多くの文献や資料を学生に見せたいと思うのですが、必要になる文献は毎回異なるうえに数も多く、非常勤講師には研究室もないため、それだけの教材を置いておける場所がありません。そこで必要な資料や教材のデータをパワーポイントに入れておいて、流れに沿って見せるという方法をとっています。ビジュアルな材料を導入することで、学生は理解しやすくなり授業時の集中度も増すので、授業の効果も上がるのではないかと考えています。

### Blackboard に資料を掲載

4 年生の受講生のなかには就職活動や教育実習などで欠席が多くなる者もいます。そこで私は

授業で使用した画像や資料、および参考文献などを、毎回の授業の後でBlackboard に掲載しておくことにしました。これは、欠席した学生が授業内容について知るためにも有効ですが、出席していた学生が復習や確認をしたり、授業で触れたテーマを自分なりにもっと深めていくためにも有効だったのではないかと思います。受講生がBlackboard に挙げた資料をもとに考えを深めたり、掲載しておいた参考文献を実際に読んで感想を述べたりすることもありました。

### 復習を習慣化するために

今年度は、学生に復習の習慣をつけるため、また学生が授業内容を理解したかどうかを私が確認するため、授業後にBlackboardを通して毎回ミニレポートを提出させたり、ショートテストを行ったりしました。

最後にまとめて大きなレポートを提出させるのとは質的な違いがありますが、毎週の小さな積み重ねが学生の興味を持続させることにつながり、また私の方でも説明の足りないところをチェックして次の授業に反映させることができました。

### セメスターごとの改訂

この児童文学の授業では、セメスターごとに新たな要素を取り入れたり、内容の改訂を行ったりしています。また、ここ数年は文学部の学科改組に伴い、教材内容を変更する必要も出てきています。例えば英米文学科の授業だった時点では英米児童文学の作品を中心に上げていましたが、国際言語文化学科になってからは日本の作品や他の国の作品も同等に取り上げるようになっていきます。

Blackboard を利用すると、これまでの授業内容をアーカイブに残して参照できるし、毎回のデータや資料の提示についてもその用意をゼロから行う必要がなく、必要に応じての改訂も容易で、便利になりました。

### 非常勤の立場から

私は非常勤で学生といつでも連絡をとれるわけではないので、Blackboard の「アナウンス」で連絡事項を伝えたり、メール機能で質問を受けたり、「デジタルドロップボックス」でミニレポートを提出させたりしています。使い始めの頃は学生が不慣れだったせいで混乱もありましたが、その後は最初にBlackboard の説明をするようにし、学生のほうでも慣れてきたため、最近ではかなりスムーズに利用できるようになりました。

### 活用事例報告③（出典：e-Education NewsLetter、2005 Vol.4）

農学部生物環境システム学科： 小原 廣 幸 助教授

「カナダキャンパスプログラム参加中の『全人教育IV』での活用」



児童文学研究 アセスメント

農学部のカナダキャンパスプログラムは約4 ヶ月、玉川カナダキャンパスを基点に環境生態調査を含む専門科目の授業や語学研修を行います。ホームステイをしながら現地のマラスピナ大学の講師によって授業を受講、調査研究や実験・実習を展開します。一方、参加期間の2年次は「全人教育Ⅳ」が必修科目。カナダのナナイモ校地に集まる授業時間を軸に、礼拝・宗教講話はもちろん、玉川で実施している「全人教育Ⅳ」の講話を録画してストリーミングビデオ配信をするなど、担任と引率の先生方が協力し、Blackboard を活用して実施。今回はその活用事例をご紹介します。

### 科目の実施規模とBlackboard の活用

◆ 科目名：全人教育Ⅳ（2 年生 30 名）

◆ 授業の概要：全学共通科目の全人教育Ⅳは礼拝・宗教講話・講話や担任指導など。カナダプログラムは「2 年次の9 月～ 12 月」「3 年次の3 月～ 7 月」の2 グループに分け、実施。現在実施中の学生は2 年次秋学期。「全人教育Ⅳ」の受講対象の学生でもある。担任は玉川キャンパスにおり、国内プログラム参加中の担任でもあり、国内の担当科目の講義も担当。学生たちは一週間に2 度ナナイモ校地に集まるうち、火曜日1 時限目を軸に、玉川にいる担任とカナダへの引率者と相互に協力しながら、Blackboard@Tamagawa を活用し、授業を運営している。

### 欠かせない渡航前の集合研修

農学部の学生としてフィールド研修や研究のためにノートPC やデジタルカメラは必須。カナダプログラムを前にして必要に迫られてはじめてMyPC を手にした学生もいれば、以前からパソコンが得意な学生まで、様々。しかも、MyPC の経験があってもウイルスチェックをしていない学生もいる。カナダで必要なソフトウェアの準備を、活用を想定してメディア教育推進室に依頼して、渡航前に集合研修を実施。ウイルス対策の方法やフィールド調査で撮影したデジタルカメラの画像をレポート活用にふさわしい解像度に縮小する方法などを、自分が日常使うMyPC で実際に自らの手でチェックする時間を設けた。またBlackboard を通して訪問国の情報収集、たとえばカナダ事情（国旗や国歌、安全等）を学びつつ、あわせて操作を体験。

### 全人教育の内容

カナダ滞在期間はわずか4 ヶ月だが、文化の差の中で学生たちは大きく成長する。礼拝と宗教講話をビデオ・資料同期教材で提供、全人教育の担任指導の領域は時間内では収まりきらないが、それでも引率者との協力のもと、キャンパスの生活以上に密接な指導もできる。ただし、全人教育Ⅳの内容の中で、特に礼拝や宗教講話は事前に非同期の動画を使った教材を作成した。

ただ、学生たちのホームステイ先からのネットワークの状態は、アクセス環境を持たない家庭な



ど様々である。そのため必要最低限の内容はナナイモキャンパスに集合した時間を用いて行い、個々の課題やローカル上での作業は各自実施することにした。

### **パワーポイントの必要性**

全人教育の科目の必須要件ではないが、帰国後にPowerPoint を使ったプレゼンテーションを行うことからBlackboard にPowerPoint 操作方法教材の掲載をメディア教育推進室にリクエストした。現地の講義内容はPowerPoint ファイルで提供され、それを予習して授業に臨まないと講義についていけない現実を考えると、帰国後の活用より現地での活用に大いに役立った。また、担任あてにPowerPoint で「カナダだより」を出す想定をしたので、PowerPoint を使ったことがなかった学生もカナダでの生活の様子を課題提出してくる。これら実際に活用する方法は副産物として、予想以上にPowerPointの操作習得に有効だった。

### **今後のカナダプログラムについて**

次年度のカナダプログラムは生物環境システム学科2年次の春学期から始まり、渡航の学年が半年早まる。現在マラスピナ大学での講義は事前教材の配付をメール添付で受けている。同大学構内はインターネット環境を活用できる状態であり、Blackboard を活用して事前資料配付だけでなく、アナウンスや授業資料の提供を受けることができれば、学生たちの学習の理解度はさらに進むと期待できる。Blackboard は多言語対応なので実現可能だと考える。また次年度は「玉川キャンパスの教員が在カナダ学生に講義」と「カナダキャンパスの教員が玉川キャンパス学生に講義」が相互に展開できるようにと、ライブ講義を計画し、準備を進めている。ライブ講義も遠隔で限られた時差と時間の中、事前・事後の資料を掲載し補完教材を利用するなど、Blackboard の活用が成果につながると期待している。